

複合文化学通信

第 12 号

2008 年 11 月 15 日

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 向後恵里子・茂木良治)



Contents

演習担当教員より 2

新任教員の紹介 6

学際コース大賞 11

fukugou-bunka@eiga
《シヨアー》高橋順一先生 13

演習担当教員より（アイウエオ順）

1. 学生に期待すること
2. 学生にひとこと
3. その他

■ 青山瑠妙先生

1. 学生に期待すること
積極的な参加
2. 学生にひとこと
楽しく明るいゼミにしていきたい

■ 楠元範明先生

1. 学生に期待すること
互いに信頼関係で行きたいと思っています
2. 学生にひとこと
勉学に時間を費やせ、必要な（大学の）資料にあたるのは、今だけです。



■ 神尾達之先生



1. 学生に期待すること
私のゼミ（あるいはより正確には福田先生と私の合同ゼミ）を登録する直前に一言。「飛びだすな、車は急に止まれない」、いや「はやまるな、ゼミは簡単にかえられない」を念頭において、深呼吸し、合同ゼミのホームページ（<http://www.waseda.jp/sem-bunka/>）と掲示板（<http://www.play21.jp/bbs/gakusai/index.html>）をながめ、合同ゼミのウザさを実感してください。そして自己決断です。「なんかシラバス面白そうだから来たけど、面倒なことばっかじゃん」とならないように。



2. 学生にひとこと
《誠実》な学生、give and take をいとわない学生と出会えることを期待しています。

■ 久保純子先生

2. 学生にひとこと
前期久保、後期藤森先生で地球環境に関する話題を幅広く扱う予定です。



■ 桑野隆先生

1. 学生に期待すること

それぞれに個性があって今後が楽しみです。複合文化学科ならではのカリキュラムを活かした斬新なタイプの「大学生」が誕生することを期待しています。

2. 学生にひとこと

さまざまな文化・社会現象と出会い、本もどんどん読み、理論的な解読装置もいくつか習得してはじめて、「高校生」ではなくなります。



■ 後藤雄介先生

1. 学生に期待すること

日常生活のなかの差異化・差別化に「敏感」になり、それが納得がいかないなら率直に「違和感」（または「怒り」）を表明し、願わくはそれを卒業研究に結びつけるのもひとつの手でしょう。

2. 学生にひとこと

・複合文化学科のひとつの大きな柱が、「英語以外の外国語の習得」であることを忘れてはならない（笑）。外国語文献を「読解」して卒業研究に生かすことは、「会話」できることと同等か、あるいはそれ以上に貴重な能力・経験です。



■ 高橋順一先生



1. 学生に期待すること

「むずかしい問題」にチャレンジする精神（「わかりやすさ」を軽べつする精神）

2. 学生にひとこと

今現に見えている世界（世界の見え方）が決して絶対的なものではないこと、一度はそうした見え方を疑ってみる必要があることを伝えたいと思います

3. その他

私は基本的に「活字人間」です。

■ 高橋良行先生

1. 学生に期待すること

自分の頭でものを考える人間になりましょう。

2. 学生にひとこと

読書をしないで思索することはできません。

■ 浜 邦 彦 先 生

1. 学生に期待すること

与えられた課題をこなすだけでなく、自分から積極的に題材を探し、テーマを見つけてほしいと思います。

2. 学生にひとこと

ゼミの主役は学生のみなさんです。教師が提示する題材は、あくまでもきっかけにすぎません。そこから自分のテーマを見つけ、自ら問いを立てること。それが、大学で求められている知的・批評的な努力です。

■ 福 田 育 弘 先 生

1. 学生に期待すること

知的好奇心と積極性のある参加を望みます。



■ 藤 森 嶺 先 生



1. 学生に期待すること

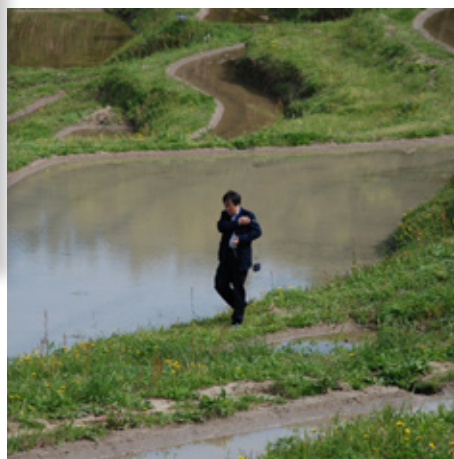
文献を読みながら考えたり、意見を交わしたりすることが大切であり、積極的に演習の時間を活用してほしい。

2. 学生にひとこと

演習は文献を正確に読み、理解することがまず重要である。

3. その他

自然科学の発展が個人の生活や地球環境に影響を与えることの意味を共に考えていきたい。



■ 丸川 誠司 先生

1. 学生に期待すること

継続的で積極的な参加を期待します。基本的な文献の精読からはじめますので、当たった人はレジュメを準備し、それ以外の人は指定された箇所をきちんと読んできてください。疑問点を出し合って皆で考えることが最初の重要なステップとなります。後は気になった点を自分で発展させ、できるだけ興味深い発表をするようにしてください。

2. 学生にひとこと

美術作品を中心とした表現形式を通じて、文化（文明）の諸側面を検討するきっかけになればと思っています。美術作品は、イメージの記憶と引用を通じ、国境と時代を超えて受け継がれるものです。「作品」は重要です！



■ 村上 公一 先生

1. 学生に期待すること

好奇心

2. 学生にひとこと

日々の生活の中で、常に何か新しい発見をしてほしい。



■ 渡邊 芳敬 先生

1. 学生に期待すること

ゼミは教員と学生の二人三脚の共同作業ですが、ゼミを有意義なものにするもしないも、あなたたち次第。ぜひ知的発見の場にしてください。

2. 学生にひとこと

知力だけでも、体力だけでも駄目。知的体力が大切です。たえざる向学心とフットワークのよさこそ、必要条件です。



新任教員の紹介

今年度から新しく複合文化学科の一員となった教員を紹介いたします。

「経歴や学歴」（多くの教員が多かれ少なかれ「複合的な経歴」をもっています！）にはじまり、「みなさんへのひとこと」のほか、「ぜひ読んでほしい、観てほしい、聴いてほしいという本や映画や音楽」をあげ、最後にそれぞれの教員の「研究室のモットー」を述べます。

「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしてきたか」に注目してみてください。

※そのほかの教員の自己紹介は、第8号を参照ください。

<http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/culture/letter/letter0008.pdf>

- 1. 略歴（学歴もふくむ）
- 2. 学生へひとこと
- 3. これはぜひという本・映画・音楽
 - (1) これは読んでほしいという著作1冊
 - (2) これは観てほしいという映画1作品
 - (3) これは聴いてほしいという音楽1曲
(ないしCD1枚ないし1セット)
- 4. 研究室のモットー

浜邦彦（はま・くにひこ）

1. 略歴（学歴もふくむ）

大阪生まれの東京郊外育ち。ちょうど言葉を話し始める頃に東京に引っ越してきたのだそうで、大阪弁は失われた母語だと思っている。

西武池袋線沿線の凡庸な町で凡庸な教育を受け、その反動で生意気に育った気でしたが、昨年、原武司『滝山コミュニケーション 1974』（講談社、2007年）のような本が出て、自分の育った場所と、受けた教育とを、思想的に位置づけなおす必要があるのかもしれないと思い始めている。

西武池袋線沿線の高校を出て、法学部志望だった浪人中に、ビクトル・エリセ監督の「ミツバチのささやき」を観てしまったために、東京外国語大学スペイン語学科に入学。入学早々に天安門事件が起こり、その都市の暮れにはベルリンの壁が崩れた。やがて湾岸戦争が起こり、ソ連が解体し、ユーゴ紛争が泥沼化する学部時代を、テレビのない木造アパートで、手当たりしだいの本や雑誌を読み漁り、ノートや手紙を書き散らしながら過ごしていた。まだインターネットのない時代、「世界」はむしろ生々しいまでの現実感をもって、ひとりの外国語学部生の思考と生活をゆさぶっていたように思う。カリブ海の研究を志したのは、ス

ペイン語学科でアレホ・カルペンティエールやガブリエル・ガルシア＝マルケスを翻訳で読んでいた時のこと。「ラテンアメリカ」では括れない、異質で多様な世界の感触を覚えて、それがどういう世界なのかと探っているうちに、カリブ海の歴史を知るようになってきた。

東大駒場の大学院に進み、その後は非常勤講師の貧乏暮らし。東京工科大学、東京外国語大学、関東学院大学、立教大学、早稲田大学ほかで教えた後、今年の春から早稲田大学の専任講師。生まれてはじめてもらった「賞与」はすべて、これまで買いたくても買えなかった本やDVDやCDに姿を変えた。

2. 学生へひとこと

教育が、望んで得られるものではないことは、世界のもっとも貧しい地域に育った若者たちでも、早稲田大学のみなさんでも、もしかしたら、同じなのかもしれません。

というのも、教育のほんとうの意味とは、自ら望んで与えられるものの多寡にあるのではなく、望まなかった、期待しなかった、思ってもいなかった、できれば避けたかった(?)異質なものととの出会いの中に

こそ、あると思うからです。

大学の教室もまた、そうした異質なものの出会いの「ひとつの」現場であると感じられるような、そこから、みなさんのひとりひとりが、ほんとうに生きたく知を学びとってゆくことができるような、そういう空間であることを、少なくともぼくは願っていますし、それは、複合文化学科の先生方（新任講師のぼくにとっては、同僚であり、先輩であり、やはり先生方です）の多くが、願っていることなのではないかと、この学科にいて思います。

異質なもののとの出会いは、決して悦ばしい、楽しいことばかりではありません。

傷つきましょう。悩みましょう。

自分の殻に閉じこもり、人との関わりを恐れ、ひとり悩み苦しみつつも、学びましょう。

悩み苦しむ人にとって、知識が、生きる力そのものといっていほどの深みと広がりを得ることも、多々あるのですから。

3. おすすめ

(1) 本

金時鐘、『「在日」のはざままで』、平凡社ライブラリー。

一冊の書物との出会いが、その後の人生を変えてしまったというような、そういう強度をもった読書体験を、いろんな人が語っている。

それでは、ぼくの場合……と考えると、ぼくの人生を変えた書物って、何だろう？ その強度って、何だろう？

そんなふうに思い返してみると、ぼくは、それほどの「強度」をもった読書すらしないまま、あれこれとつまみ食いばかりしてきた、気まぐれで中途半端な人間なのだと思えてくる。そんな気まぐれで中途半端な人間が、早稲田大学の教育学部で教えている、ということに、なにか恥じ入るような気持ちにもなってくる。

だけど、日々の授業の準備のために、もっとよく理解するために、答えを探すために、あるいは知的な励



ましを得るために、あるいはただ習慣のために、幾度となく読み返してきた書物なら、たしかに、ぼくにも何冊もある。

その一冊が、金時鐘（きむ・しじょん）という、ひとりの在日朝鮮人の詩人の手になる、この本である。

この、ひとりの在日朝鮮人の詩人が、ほとんどその全存在を賭けて書き記そうとしているのは、ある小さな、ひそやかな、まったく個人的と言ってもいいような、しかし特別な強度をもった、ひとつの「うた」との出会い、ひとりの「犯罪者」との出会い、ひとりの生徒との出会いである。その出会いを真摯に考えぬこうとする者の、言葉の震え、思考の震え、人間存在の震えである。

ひとつのうたの響きや、ひとりの犯罪者の名前や、ひとりの生徒の涙が、ひとりの人間としてそれに接するその人の全存在を、震撼する。そういう瞬間を、この本はぼくに伝える。書物を通じてその震えに接するとき、ぼくはやっぱり震える。

ぼくは今年から、教育学部というところで教えている。教育と、表現と、批評とが、一体不可分のものであるということを、これほどにも深く、厳しく、しかも澄みわたった、みずみずしい言葉で教えてくれる金時鐘という詩人の本を、ぼくはこれから、ますます読み返すことになるだろう。この、ひとりの在日朝鮮人の詩人は、ぼくにとって、たぶん生涯のヒーローである。

（２）映画

ユーリ・ノルシュテイン監督、「話の話」（1979 年）※

「アニメーション」の原義が「生命を吹き込むこと」であるとしたら、それはまさしく、創造の神秘にかかわるような「業（わざ）」であるはずだろう。ユーリ・ノルシュテインは、神ならぬ人間にとって、この「業」が「技」すなわちアートとしてあるのだということを根源的なかたちで教えてくれる、稀有な芸術家である。

（※「話の話」は DVD『ユーリ・ノルシュテイン作品集』に収録されています）

（３）音楽

WAR, Anthology 1970-1994

（Avenue Records, 1994）

ジャズ＋ファンク＋ラテン＝「ザ・ミュージック・バンド」。

1960 年代末の U S 西海岸で、人々が二本指で V を模った「ピース・サイン」（実は「ビクトリー」サイン）を掲げていた頃、三本指で W を模った「ウォー・サイン」を掲げ、ストリートに「宣戦布告」をしたバンドがあった。

このアンソロジーは、その彼らの圧倒的な音楽的パワーを余すところなく教えてくれる、最強のコンピレーションである。ぼくはこれを、少なくとも百回は聴いている。死ぬまでに、あと数百回は聴くだろう。

（４）研究室のモットー（？）

「自分の家でくつろがないことが、（今日では）道徳の一部なのである」とアドルノは言った。でも、自分の研究の「ホーム」があるのは、やっぱりいい！



茂木 良治（もぎ・りょうじ）

1. 略歴（学歴もふくむ）

東京生まれ東京育ち。小学校から高校まで九段にある私立へ通う。サッカーが好きで、昼休みは校庭でサッカーばかりをしていた。このころから、フランス人サッカー選手ミシェル・プラティニが好きという安易な理由でフランス語の勉強を始める。高校時代は勉強が嫌いであえなく受験失敗。1年の浪人生活の後、上智大学外国語学部フランス語学科に入学、大学3年の時、何年もフランス語を勉強してもなかなか身につかないという悩みから応用言語学（外国語教育学）に興味を持ち始める。同大学外国語学研究科言語学専攻へと進み、当時大学に普及し始めたコンピュータを利用して、外国語教育に活用できないかと考え、本格的に研究を始める。大学院在学時に研究の幅を広げたいと考え、フランス北部リールへと留学。初めて親元を離れたため、生活に慣れるのに苦労しつつも、約4年間滞在。その後、縁あって2008年4月より早稲田大学で助手として着任。

2. 学生へひとこと

大学を卒業して約10年になりますが、今でもあの頃もう少し真面目に勉強していればな～なんて後悔することがあります。今思えば、楽な方へ逃げてばかりでした。大学生は自由に使える時間がたくさんあるため、やるべきことを後回しにしてしまいがちです。いろいろなことに挑戦して有意義な大学生活を過ごしてください。

3. おすすめ映画

最近見た映画2つとフランス留学中に見て面白かった映画を紹介します。

(1) 『ペルセポリス』(マルジャン・サトラピ監督)

原作はイラン出身パリ在住の著者の自伝的なBD(フランスの漫画)。フランスでは大ヒット、日本語にも翻訳されています。

イラン革命後の男女交際の禁止やスカーフ着用義務など厳しい法律が制定されたイスラム社会と留学先ウィーンで体験した西欧文化の対比を主人公の少女マルジの視点から描いている作品です。イスラム文化出身の人から見ると西欧文化はこう見えるのかとかいろいろ発見があります。



リール オペラ座前にて

(2) 『潜水服は蝶の夢を見る』(ジュリアン・シュナーベル監督)

雑誌ELLEの編集長が突然病気で倒れ、全身麻痺になり、左目の瞬きしかできなくなるが、瞬きだけで自伝を書き上げるという話。テーマを聞くと、シリアスな映画かと思ってしまうが、全身麻痺のせいで言葉を発することができない中年男性患者の本音(?)が聞けて、実際は笑いに富んだかなり面白い映画です。

(3) 『スパニッシュアパートメント』(セドリック・クラピッシュ監督)

フランス人大学生が欧州交換留学制度エラスムスでバルセロナに留学し、そこで他の国の留学生たちとコロカシオン(共同賃貸)するというお話。

主人公はフランス人なので、言語は基本的にはフランス語ですが、スペイン語、ドイツ語、英語が飛び交うまさに複言語的な映画です。文化や言語の違いなどの面からも面白い映画です。留学に興味のある方にはおすすめです。

4. モットー

基本的に学生の皆さんが有意義な学生生活をできるよう裏方で働いています。その他に、外国語科目のCourse N@vi関連の仕事をしています。皆さんがCourse N@viで効果的に外国語を学習できるような工夫を日々考えています。もし何か要望があれば、遠慮なくおっしゃってください。

向後恵里子（こうご・えりこ）

1. 略歴（学歴もふくむ）

千葉県北東部、利根川の流れる人口1万5千人のごくごく小さな町生まれ。小学生の頃は毎日ランドセルを放り投げ、日の暮れるまで遊んで過ごしました。繁華街も予備校もなく、電車は一時間に一本のみ、なので、都会に憧れを抱きつつも、しごくのんびりと育ちました。

それでも高校の時分には友人と『ぴあ』を握りしめながら東京の美術館を訪れました。当時、ゴッホの《星月夜》とブランクーシの《無限柱》に感動し、モノを見る喜びに触れたことが、のちに美術史を専攻するきっかけの一つになっているようです。

早稲田大学第一文学部へ進学、上京。当時は漠然と文化と歴史に興味を持っていましたが、創作に関心もあり、文芸、演劇、歴史など、何を学びたいか揺れ動いていました。結局、多様な関心を生かしたいと考え、「学際的」と言われていた美術史を選びます。

とはいえ、学生生活はあまりパツとしませませんでした。都会のペースになかなか慣れず、特別何かにめきんじているわけでもなく、語学も不得手で、とても出来の悪い学生でした。それでもいつの頃からか、まだ学び足りない、自分の力で考えられるようになりたい、と感じて大学院へ進学します。

専攻とした日本近代美術史を学んでゆくなかで、だんだんとモノやイメージや人々の営みを、もっと多様な文脈—美術に限らず、ひろく文化や社会—が交差する場を開いて、そのダイナミズムを受け止めてみたい、そうした歴史を自分なりに描いてみたい…と考えるようになり、右往左往しながらも今日にいたります。

2. 学生へひとこと

昨年より学際コース助手として勤めさせていただいています。まだまだ修行中で半人前ですが、皆さんの学びの場の、縁の下の力持ちになればと思っています。どうぞ気軽に声をかけてください。

学生生活では、想像力をのばすことを大切にしたいなと思います。想像力は、ナイーブな、独りよがりの狭い視野からは生まれません。好奇心をもって多くの人やモノと出会い、視野を広く・深く育ててください。

3. おすすめの作品

（1）映画：『ムッソリーニとお茶を』1998年

（フランコ・ゼフィレッリ監督）

舞台は1930年代～40年代半ば、ファシスト政権が力を伸ばしつつあるイタリアトスカーナ地方。フィレンツェの外国人居住区に住むイギリス人女性たちと孤独な少年の物語です。政治情勢に翻弄されながらも、イギリスとイタリアの文化を愛し、自らの信ずるところをゆずらない姿勢が、静かに、ユーモラスに、時に熱をこめて描写されています。彼女たちはただ頑固なだけでなく、弱い立場の人や物言わぬ作品を当然のように守ろうとし、また自らの過ちを正すことにも躊躇しません。その姿に打たれるものがありました。

（2）本：『アウステルリッツ』W・G・ゼーバルト著

鈴木 仁子訳 白水社 2003年

ほとんど段落替えないまま続いてゆく文章と、その間に配された多くの写真が特徴的な小説です。「アウステルリッツ」は、登場人物の名前であるとともに、人や土地の記憶と結びつき、有機的なイメージを喚起してゆきます。読後は、近現代ヨーロッパの記憶と歴史をめぐる長い旅路を、アウステルリッツとともに歩いたかのような気分をおぼえました。イメージと記憶、歴史に関心のある方におすすめしたい一冊です。

4. 研究のモットー

書家であり歌人であり美術史家であった会津八一は、四項目からなる「学規」をのこしています。いわく、「ふかくこの生を愛すべし／かへりみて己を知るべし／学芸を以て性を養ふべし／日々新面目あるべし」。とてもこの境地には至りませんが、折に触れて思い出します。できれば、「この生」だけではなく、「あの生」——自分以外の誰か、歴史上の有名無名の人々を、「ふかく愛す」ことができるといいなと考えています。



学際コース大賞

2007年度の「学際コース大賞」選考委員の選考の結果、以下のとおりになりましたのでお知らせいたします。受賞された方、おめでとうございます。

金賞から銅賞に該当する論文を「学際コース大賞受賞論文集」として公開しています。

【金賞】

杉田晃一（指導教員：伊藤守）

「おもしろさ」の再構築と創造—ニコニコ動画におけるコミュニケーション分析—

（選考理由）

従来のオーディエンス研究の流れを踏まえつつ、「ニコニコ動画」を切り口にして映像を見ることの意味とその「おもしろさ」を分析したものです。インターネットに関する研究は、このメディアの持つ多角的性格を反映し、さまざまな議論を産出していますが、本論文では製作者でありかつ消費者である、しかもまた消費者にとどまることなく批評者でもありうる「動画サイト」という空間の特性を浮かび上がらせることに成功し、現在のメディア環境の可能性とそこに成立するコミュニティの課題の析出に成功しています。

【銀賞】

堀口弘恵（指導教員：神尾達之）

大人の女性だけのユートピア世界—宝塚の男役の魅力とは？—

（選考理由）

宝塚歌劇について、複数の素材、方法、理論から分析することによりその魅力を明らかにしようとした力作です。とりわけ「《女性の幻想の中の男性像》の《体現者》として《共感》するまなざし」、「澁瀬と輝く姿や女性としての美しさを《尊敬》するまなざし」、「儚い幻想世界の中の《偶像》として《擬似所有》するまなざし」という三つの眼差しの発見は極めて独創的なものです。

【銅賞】

齋藤巧（指導教員：野谷文昭）

ジミ・ヘンドリックスのハイブリッド性—アメリカ合衆国黒人音楽との関係、そしてその可能性について

（選考理由）

これまで黒人音楽史の流れからはみ出す天才異端児とされてきたカリスマ的ミュージシャン、ジミ・ヘンドリックスについて、その音楽性の分析に本格的に取り組み、あらためて黒人音楽史の中に適切に位置づけようとしたものです。それは合衆国黒人音楽の「本質」に関する通説に対する批判でもあり、黒人音楽の新たな読み解きの可能性を提示しています。

【奨励賞】

青木陽香（指導教員：原宏之）

広告における言葉の使用と再生産

（選考理由）

広告を対象としながらもコピーの分析に焦点が絞られ、また記号論による分析方法が終始ゆるぎなく一貫していることから、広告コピーの時代別（戦後日本）の分析から世相を浮き彫りにする力作になっています。1960年代から現代までの日本社会における「欲望」の変遷史としても読み応えがあります。

【奨励賞】

天野弘太郎（指導教員：原宏之）

笑いの戦略—漫才の「ボケ」と「ツッコミ」—

（選考理由）

先行研究を参照しつつ漫才の発生と歴史をおさえた上で、「ボケ」と「ツッコミ」の役割関係について、しっかりとしたカテゴリー分類を行っています。M1 グランプリを中心とした膨大な量のコーパスを網羅的に分析しており、「誘発頻度」「参与時間」「言語的分類」をもとに各漫才コンビの特性を読み解いている点は非常に独創性の高いものです。

久保田健太郎（指導教員：高橋順一）

日本のヘリテージ—天皇からパトリヘー

（選考理由）

大日本帝国憲法によって担保された日本国家＝社会の統治、統合構造を戦後の日本国憲法体制へ連続的に継承させる役割を担った象徴天皇制の本質的性格を読み取った上で、象徴天皇制のポテンシャルが尽きようとしている現状を分析し、新たに「パトリ」という概念を提示し、よりゆるやかな国家＝社会統合モデルの提起を試みています。現代日本社会のアクチュアルな課題に切り込んだ力作です。

三宅沙知子（指導教員：後藤雄介）

黒い憂鬱を超えて - 黒人の発展に対するシェルビー・スティールの思想変遷

（選考理由）

アファーマティブ・アクション政策（黒人及び諸マイノリティに対する積極的優遇政策）に黒人の立場からあえて反対の意思を表明した論客シェルビー・スティールについて、複数の著作を系統的に読解することでの思想変遷を綿密に跡づけたものです。対象者の著書の邦訳が1冊しかないため、他の著作については英文原著を丹念に読み解き、また関連する英文論文も十分に消化、活用しており、日本語論文に頼りがちな学際コース卒業研究の中では、その研究姿勢、達成度には抜きん出たものがあります。



ショアー 1985 年 フランス クロード・ランズマン監督

この映画は、一般的には「ホロコースト」と呼ばれるナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺の問題を主題にしています*。「ホロコースト」を主題にした映画やドラマはこの作品以前にも数多くありました。しかしこの『ショアー』という作品はそうした「ホロコースト」を主題とする他の映画やドラマと根本的に違う性格を持っています。この映画で監督であるランズマンは「ホロコーストを再現＝表象することの不可能性」というテーマを立てます。つまり映像という手段を用いているにもかかわらず、この映画は映像によるホロコーストという過去の出来事の再現の可能性を断念するところから始まっているのです。映像による過去の再現可能性は二つのやり方に依存しています。一つは過去の記録映像を使ってドキュメンタリー風に再現するというやり方です。アラン・レネの『夜と霧』はその典型でした。この作品は移送される囚人たち、殺された遺体の山などの映像を並べることによって過去を再現しようとしています。もう一つのやり方はフィクションの枠組みの中で一個のストーリーを構成するやり方です。つまりドラマとしての再現です。ステイヴン・スピルバーグの『シントラーのリスト』はその典型といえます。

ランズマンはこうしたやり方を拒否します。理由は二つあります。一つはナチスによるユダヤ人の集団虐殺が歴史においてただ一回限りの、いかなる想像も比較も許さない絶対的な出来事であることです。それは、誰も二度と再現することの出来ない唯一的な出来事なのです。もう一つの理由は、この絶対的な出来事について語る資格を持つ当事者が死者だけだということです。死者は二度と語ることは出来ません。だから表象不能なのです。

ランズマンは、この不可能性を外周から埋めてゆくように死をまぬかれて生き残った人々の証言を収集してゆきます。この映画のほとんどがそうした証言の場面からなっています。そして証言が重ねられる中から死者の絶対的不在が痛切に認識されます。死者は二度と帰らないのです。だがこの死者の絶対的な不在はネガの形で死者たちの存在を呼び起こします。証言が浮かび上がらず死者たちの不在がかえって死者たちの存在への深い想起を促すのです。そしてこの死者への想起は、いわば死者の不在的現前という形を取りながら、アウシュヴィッツ以後**生き残ったすべての者たちにとっての死者への真の意味での喪＝哀悼へとつながります。ランズマンが、「殉教」を意味する「ホロコースト」という言葉によって死者に救いの余地を残す代わりに、「絶滅」を意味する「ショアー」という言葉によって救いの余地を封じる理由も、死者の回帰と証言の不可能性と向き合うことからしか死者の不在的現前を通した真の喪＝哀悼は始まらない、という思いがあるからなのです。

* 1933 年から 45 年にかけてナチス・ドイツはヨーロッパに住むユダヤ人 1000 万人のうち約 600 万人を殺戮しました。

**ヨーロッパでもっともユダヤ人の多かったポーランドにナチスはユダヤ人の組織的殺戮のための絶滅収容所を六ヶ所作りました。その代表が約 160 万人のユダヤ人が殺されたアウシュヴィッツ（オシフェンチウム）です。「アウシュヴィッツ」はナチスのユダヤ人殺戮行為を象徴する言葉となりました。

(高橋順一)